

英語を話し人間社会で生きるクマ

—*A Bear Called Paddington* における Paddington の位置づけ—

若谷 苑子

はじめに

Michael Bond による *A Bear Called Paddington* (1958) は、〈Paddington Bear〉シリーズ¹の1作目であるが、英語を話すクマであると同時に Darkest Peru からの移民である Paddington の物語である。物語の着想について Bond 自身が彼の妻に買った玩具のクマにあると語っているが (Postscript 155)、作品に登場する Paddington は玩具のクマではなく、本物のクマ、それも、英語を話すことのできる「もの言うクマ」なのである。

A Bear Called Paddington において、Paddington は彼の名前の由来となる駅で、後に彼とともに暮らす人間の Brown 夫妻に出会う。そこで彼は、“Good afternoon,” (*A Bear Called Paddington* 9) と英語を発する。Paddington が英語を話せる理由は、Paddington のおば Aunt Lucy が教えたからだとテキストで説明される。Paddington は、英語の言語能力を携えて、英語が話されるイギリス社会へやって来たクマなのである。

A Bear Called Paddington とそれに続く〈Paddington Bear〉シリーズの他の作品では、イギリスは英語が話される社会であると同時に人間たちが暮らす社会である。そこには Paddington 以外の動物はほとんど描かれない。シリーズ全体ではクマ以外の動物も何種類か登場するが、シリーズで主に描かれるのは Paddington のイギリスの人々との交流やそこで彼が引き起こす騒動であり、Paddington の人間社会での生活である。そのなかで、*A Bear Called Paddington* は、Paddington の Brown 家との邂逅にはじまり、イギリスに住む人々との交流を描いている。すなわち、Paddington の人間社会への参入と彼が受け入れられている様子を描いている作品であると言える。それでは、なぜクマである Paddington はイギリスの人間社会に参入することが可能であったのか。そして、彼はイギリスの人間社会において、どのように位置づけられているのか。そこには Paddington の英語能力、特に英語を話す能力が強く関係しているのではないだろうか。

本論文では、*A Bear Called Paddington* を研究対象とし、人間の言語を話すもの

言う動物が人間社会に参入する物語という視点から、物語世界において、クマが英語の会話能力を持つ時、どのように人間社会に受け入れられているかを探求し、Paddington のイギリスの人間社会における位置づけを明らかにする。第1章では先行研究を概観し、第2章ではクマがイギリスの人間社会へ参入するために必要な能力が英語を話す能力であることを提示し、Paddington がそれによってイギリスの人々と縁を結ぶことを示す。第3章では、英語を話す能力を持つことでイギリスの人間社会に参入したクマ Paddington に対するイギリスの人々の認識を確認する。第4章では Paddington がどのような存在としてイギリスの人間社会において位置づけられ、受け入れられているかを検討する。

第1章 先行研究の概観

A Bear Called Paddington について、安藤聡は、「この作品の不思議な点は、パディントンが言葉を話し、人間のようふるまっていることに周囲の人間たちが驚いていないということである」(53) と述べ、この点について、「彼がブラウン夫妻と出逢った最初の瞬間に、言葉を話す子グマがいるというファンタジーの世界への扉が一度だけ開かれた、と考えると面白い。これ以降のエピソードはすべて、この扉の中の世界の出来事なのである」(53) と指摘する。しかし、言語という点と、もの言う動物が人間の社会に参入するという点に着目すると、イギリスの人間社会への参入と動物である Paddington の英語を話す能力との関係において、英語を話す能力が *A Bear Called Paddington* に描かれるイギリスの人間社会へ参入するための切符のようなものとして提示されていると考えられる。本論文では、まず、Paddington の英語を話す能力とイギリスの人間社会への参入との関係を示し、これを起点に、Paddington のイギリスの人間社会における位置づけを確認する。

Paddington が「クマ」だけでなく、「子ども」と「大人」の側面を持っていることは複数の研究者によって指摘されている。Margaret Blount は、Paddington について “Paddington takes the bold step of combining the roles of mascot or toy, with pet, and youngest son and has a privileged and independent life;” (308) と述べている。さらに Blount は “Being an animal in England he is loved almost automatically, being adult he can answer back and win arguments, and being a childish stranger he can say about almost every new situation he meets [...]” (322) と述べている。加えて Blount は、後述するが、Mrs Brown の Paddington の小遣いについての発言において “child” (311) のようであることを指摘している。また、森恵子は、

Paddington が「人間世界に同化したクマという特徴をも」(127) っているが、「好奇心が強く、考えるよりもまず行動してしまう子どもそのものといえるパディントンだが、大人のような側面もある」(127) と言う。福本由紀子は「Paddington のユニークな点は、子どもらしくひたむきに好きなことに取組みはするが、欲求のまま無秩序に行動するのではなく、独自の信念を持って論理的に行動する点である。(中略) その慎重さは単なるクマの服を着た幼い子どもの様相ではなく、思慮深い大人のようにも見える」(6) と指摘する。さらに福本は Mr Gruber が「Paddington を “Mr. Brown” と呼び、Brown 家の一員として、子どもではなく一人の大人として対等に接する」(7) と指摘している。

しかし、先に挙げた研究では、Mrs Brown の小遣いについての発言に対する Blount の指摘と、福本の Mr Gruber の Paddington の呼び方に対する指摘を除いて、主に Paddington の性格や特徴から彼の「クマ」、「子ども」、「大人」の側面が結論づけられている。そこで、本論文では、英語を話す動物である Paddington の作中における位置づけを検討するために、作中人物の Paddington への呼びかけや彼を示す語から、彼が「クマ」、「子ども」、「大人」としてイギリスの人々から認識されていることを示す。なお、作中人物の認識を示す際は「クマ」、「子ども」、「大人」というように鍵括弧をつけて記す。以上を踏まえ、なぜ先述したような3つの認識を Paddington が得ているのかを彼がクマという動物の身体を持っていることに注目して検討し、さらに彼が英語を話すクマであるからこそ人間社会において人間とは異なる特殊な存在として位置づけられていることを提示する。

既に述べたが、Paddington は移民である。物語冒頭から彼が移民であることが示され、彼の Mr Gruber との友人関係においてもそれが巧みに機能している。Blount は “[...] Mr Bond’s real master stroke is to give Paddington, right from the start, some of the behaviour and reactions of an adult foreigner.” (309) と述べている。Peter Hunt と Karen Sands は “The View from the Center: British Empire and Post-Empire Children’s Literature” (2000) において Paddington とイギリスの文化について言及し (48)、Angela Smith の “Paddington Bear: A Case Study of Immigration and Otherness” (2006) や Kyle Grayson の “How to Read Paddington Bear: Liberalism and the Foreign Subject in *A Bear Called Paddington*” (2013) は彼が移民であることや他国民であることを中心に議論を展開している。移民という点は、イギリスの人間社会における他者あるいは周縁的存在という点で動物と重なり、英語を話すことで社会に受け入れられるという点においてももの言う動物と重なる部分があるだろう。本論文は、Paddington が英語を話すクマであることを注視するものであり、彼が移民であることについて先述の論考のように中心的には扱わないが、Paddington のイ

ギリスの人間社会における位置づけを考察する点において、彼が動物であり、移民であることについても示唆できればと、考えている。

第2章 クマのイギリスの人間社会への参入と英語を話す能力

Paddington が英語を話すクマであることは既に述べた。しかし、Paddington はものを書くこと、読むことができるクマでもある。主に彼が使用する言語は英語だ。例外として、Paddington がフランス語を話すことがシリーズの後の作品 *Paddington Abroad* (1961) において示唆される²。また、Paddington の出身地 Darkest Peru の言語は *A Bear Called Paddington* で語られることはない。同シリーズの作品 *Paddington on Top* (1974) における、ペルーから招致されたラグビー選手と Paddington の会話はテキストでは英語で書かれている。Paddington が自身にラグビー経験がないことをペルーの選手に説明した時、“[...] the visiting team's command of English wasn't quite up to Paddington's explanations, [...].” (*Paddington on Top* 121) と地の文において語られていることから、彼らの会話は英語で行われていると考えられる。話される言語が主に英語であるのは、〈Paddington Bear〉シリーズの舞台が主にイギリスであることもその理由の1つだろう。

それでは、イギリスを舞台にする *A Bear Called Paddington* において、Paddington の英語能力はどのような働きをしているのか。Paddington の英語能力は、英語を話す、書く、読むことである。彼は英語で人間たちと会話し、自分の名前を書き、本を読むことができる。しかし、これらの言語能力のなかでイギリスの人間社会に参入するために最も重要な能力は英語を話す能力である。まずはそれを証明したい。

第1節 イギリスの人間社会への参入切符としての英語を話す能力

Paddington は英語を話せる理由について、Brown 夫妻に “Aunt Lucy always said she wanted me to emigrate when I was old enough. That's why she taught me to speak English.” (*A Bear Called Paddington* 10) と説明する。実際には Aunt Lucy は Paddington に様々なことを教えていたことが後に判明する (*A Bear Called Paddington* 35)。しかし、先に挙げた Paddington の説明は、Aunt Lucy が、Paddington がイギリス社会に移住する時、英語を話す (“to speak English”) 能力が必要になることを認識していたことを示唆する。

Aunt Lucy から英語を話すことを教わった Paddington はイギリスの人間社会へ受け

入れられる。物語の冒頭では、Paddington は Brown 夫妻から遠巻きに観察される。Mrs Brown の彼を発見する以前の “A bear? On Paddington station?” (*A Bear Called Paddington* 8) という問いかけと、発見後の “It is a bear!” (*A Bear Called Paddington* 9) という反応は、彼女が Paddington に Paddington 駅においては異質な存在を見るかのようなまなざしを向けていることを示唆する。さらに、地の文では Paddington は “a small, furry object” (*A Bear Called Paddington* 8) という「もの」として描出される。しかし、Paddington は既に引用したように、“Good afternoon,” (*A Bear Called Paddington* 9) と Brown 夫妻へ挨拶する。クマに英語で挨拶されたことに “‘Er... good afternoon,’ replied Mr Brown, doubtfully.” (*A Bear Called Paddington* 9) というように Mr Brown は反応し、その後 Paddington と Brown 夫妻は英語で会話を続ける。Paddington が英語で話しかけることによって、Paddington と Brown 夫妻は交流をはじめめるのだ。

Brown 夫妻と Paddington の出会いの場面において、Paddington が彼らに英語で話しかけたことは大きな意味を持っている。矢野智司は「動物が人間のように言葉を話して人間とのコミュニケーションが可能になると、一般に動物の他者性はぐっと少なくなる」(69) と述べているが、この場面における Paddington と Brown 夫妻の場合にも同様のことが言える。実際に Paddington と話をするまで、Brown 夫妻は Paddington のことを話題にし、興味を持っているにもかかわらず、自分たちからは声をかけず、観察するだけである (*A Bear Called Paddington* 8-9)。しかし、Brown 夫妻は Paddington に英語で話しかけられたことを契機に彼と会話し、交流しはじめる。このことから、Paddington が会話のできる相手であることを Brown 夫妻が認識したからこそ、彼らは交流をはじめたのだと考えられる。Brown 夫妻は、遠巻きに観察していた Paddington と会話ができる距離に物理的に近づいているだけでなく、その後 Paddington に英語、すなわち Brown 夫妻の使用する言語で声をかけられることによって、「もの」であったクマが同じ言語でコミュニケーションのとれる相手であると認識し、交流を開始する。Brown 夫妻は英語で声をかけられることによって、クマである Paddington に対して精神的な距離をも縮めたのだ。

Brown 夫妻と Paddington の邂逅の後、安藤が指摘したように (安藤 53)、Paddington がもの言うクマであることに対して驚く人々は作中において描かれない。イギリスの人々はクマである Paddington に戸惑うことなく英語で話しかけ、Paddington も英語で答える。Paddington に対して否定的なまなざしを向ける人々もいるが、彼らも同様である。Paddington がもの言うことに人々が驚かない理由は、彼が英語という人間の言語を話すからだ。矢野は「動物が表す他者性とは、同じ言語ゲームに属さない共同体の「外部」を表す他者性である」(43) という。しかし、Paddington は英語

(人間の言語)を話した瞬間に共同体を乗り越え、イギリスの人々の共同体に入りこんだのだ。だからこそ、ウェイトレスをはじめ、*A Bear Called Paddington* に登場する人々はクマである Paddington がその場にいることや英語を話すことに対して驚きを抱かず、文字通り彼を受け入れる。

なぜ Paddington はイギリスの人々に受け入れられるのか。Paddington が参入するイギリスという社会は、人間たちが人間たちの法や規則の下に暮らす人間の社会である。しかし、Aunt Lucy から Paddington がこの社会で暮らすために英語を話すことを教わったことや、Paddington と Brown 夫妻との邂逅時のやりとりから、英語を話すことがこの社会に受け入れられる第1条件だと考えられる。英語を話すことはイギリスの人間社会へ参入するための切符のようなものであり、その参入切符を既に獲得しているために Paddington はイギリスの人間社会に拒否されることなく参入できたのである。

イギリスの人間社会への参入切符は英語を話すことであり、その他の言語能力は、話すこと以上には問われていないようである。既に述べたように、Paddington は英語を書くことも読むこともできる。しかし、彼の英語を書く能力について言えば、彼は英語を正しく綴ることができない。Paddington は Mrs Brown に与えられた名前 “Paddington” を受け入れるが、彼は自身の名前を、彼の名前の由来である駅名 “Paddington” ではなく、“PADINTUN” (*A Bear Called Paddington* 35) と綴る。地の文において Paddington の名前が “Paddington” と綴られていることから、読者にとって彼の署名が間違いであることは明白だが、Paddington は間違った綴りのまま自らの名前を書き続ける。むしろその綴りこそが彼自身にとっては “It looked most important.” (*A Bear Called Paddington* 35) と説明される³。Paddington が書く英語には他にも綴りの間違いが見られる。例えば、劇場に Brown 一家とともに訪れた Paddington が Brown 一家に宛てたメモには、“I HAVE BEEN GIVEN A VERRY IMPORTANT JOB. PADINTUN. P.S. I WILL TEL YOU ABOUT IT LAYTER.” (*A Bear Called Paddington* 114) というように、数単語に綴りの間違いが見られる。Grayson は Paddington の犯す綴りの間違いが “lack of education” (Grayson 386) を示唆すると言う。しかし、それらを発音した場合、正しい綴りとの差異はほとんどないと思われるものばかりだ。また、これらの綴りの間違いは *A Bear Called Paddington* においてイギリスの人々から注意されることはない。このことから、*A Bear Called Paddington* に描かれるイギリスの人間社会では、正確な綴りよりも発音が優先されていると言える。この社会で重要視されるのは英語を話すことであり、英語を書くことは話すことに対して副次的なものであることが示唆される。また、Paddington の英語を読む能力は、彼に様々な知識を与える。その知識は作中において役立つが、英語を話すことに比べれば、英

語を読むこともまた、Paddington の人間との交流においては副次的なものだと言える。また、この Paddington のあり方は、「単に言葉を発することから、読み書きという次の学習段階へと自然に移行する」(笹田 102) 現実の子どものあり方と重なる。

第2節 会話で人々と縁を結ぶ Paddington

イギリス社会への参入切符を持つ Paddington は、Brown 一家をはじめ、様々な人々と会話する。しかし、Paddington は自分自身のことについてほとんど語らない。Brown 夫妻との出会いでは出身、イギリスへ来た方法、好きな食べ物、なぜ英語が話せるかなどについて話す。しかし、Brown 一家全員が揃ったところで Mr Brown が Paddington に対して “Suppose you tell us all about yourself and how you came to Britain.” (*A Bear Called Paddington* 42) と声をかけた時、Paddington は Aunt Lucy の存在と Darkest Peru からイギリスへ来たという既出の情報のみを語ったところで眠りこんでしまう。その後、*A Bear Called Paddington* で彼に関する他の情報が彼自身の口から語られることはない。

しかし Paddington は英語での会話によって人々と縁を結び、関係を構築する。Brown 夫妻は、既に述べたように、Paddington に話しかけ彼を家族に迎え入れる。Mrs Bird は Paddington と言葉を交わし、Paddington を友好的に受け入れる (*A Bear Called Paddington* 27)。Brown 家の娘である Judy は Paddington に興味を持つ。次の Judy と Paddington の会話は彼らの友好的な関係のはじまりを示唆する。

“[...] Then you can tell me all about South America. I'm sure you must have had lots of wonderful adventures.”

“I have,” said Paddington earnestly. (*A Bear Called Paddington* 20)

また、Paddington は Mr Gruber とココアを片手に、世間話に加えて、Mr Gruber と Paddington の両者が暮らしたことのある南アメリカについて話し合ったり、Paddington が彼の知らないイギリスのことについて Mr Gruber に尋ねたりする (*A Bear Called Paddington* 83-87)。このような Mr Gruber は Paddington の “friend” (*A Bear Called Paddington* 83) とテキストにおいて称される。

これらの人物以外の人間と Paddington は友好的な関係を築いたり築かなかったりと様々であるが、Paddington は彼らと交渉したり議論したりする。Paddington は、俳優の Sir Sealy Bloom に対しては演劇を事実だと勘違いして彼の娘(役)を解放するように迫り (*A Bear Called Paddington* 110-12)、無駄にしたと言って感光板

の代金の支払いを迫る写真屋には写真屋の使った言葉を利用して反論する (*A Bear Called Paddington* 123)。しかし、それらは全て良い方向に動く。後述するが、Sir Sealy Bloom に直接交渉したことによって Paddington は Sir Sealy Bloom にプロンプターの役割を任じられる。また、感光板の代金を請求する写真屋は別の写真屋によって追い払われ、Paddington は後者の写真屋に写真を撮影してもらう (*A Bear Called Paddington* 123)。Paddington の人々との議論は彼の意見を人々に伝えるだけでなく、彼の立場を好転させさえもするのである。

Paddington は、もの言うクマであるがゆえに、人々と会話をすることで縁を結び、議論や交渉をし、状況を好転させることができる。この力は、彼らが英語という言語を共有する時に発揮される。つまり、イギリスの人間社会へ参入するための切符である英語を話す能力を持つ Paddington だからこそ、会話でその社会に住む人々と縁を結ぶことができるのである。言語を共有し話すということは、同じ言語を話す存在との会話を可能にし、距離を縮め、縁を結ぶ。このように、*A Bear Called Paddington* において、英語を話す能力は、人間の他者であるはずのクマがイギリスの人間社会へ参入するための切符であり、人々に受け入れられるための第1歩なのである。

第3章 イギリスの人間社会に参入したクマに対する人間の認識

イギリスの人間社会への参入切符を持ちその社会へ参入したもの言うクマ Paddington だが、それでは彼はイギリスの人々にどのように認識されているのか。Paddington は自らが「クマ」であることを主張し、イギリスの人々は基本的に彼を「クマ」として認識している。しかし、Paddington のことをイギリスの人々が時には「子ども」、時には「大人」として認識していることが作中人物の Paddington への呼びかけや彼を示す語から確認できる。

第1節 「クマ」「子ども」「大人」として認識される Paddington

Paddington は、“I’m a very rare sort of bear,” (*A Bear Called Paddington* 10) と言い自らが「クマ」であることを示すが、イギリスの人々にも「クマ」として認識されている。Mrs Brown は、Paddington をはじめに認識した時、Paddington を「クマ」(“bear” (*A Bear Called Paddington* 9)) と示す。Judy は Mrs Bird に対して Paddington を “It’s a bear. His name’s Paddington.” (*A Bear Called Paddington* 26)

と紹介する。Mr Gruber は Paddington に対して “You’re obviously a very valuable young bear.” (*A Bear Called Paddington* 85) と言う。Paddington が買いものに訪れた Barkridges の支配人や Sir Sealy Bloom、Brown 家の隣人 Mr Curry などの他の人間たちも Paddington を「クマ」と呼ぶ。Paddington はイギリスの人々に「クマ」として認識されているのである。

しかし、Paddington は「クマ」として認識されながらも「子ども」として扱われることがある。Mrs Brown は Paddington の小遣いを決める時に “He can have a pound a week, the same as the other children,” (*A Bear Called Paddington* 32) と言って自身の子どもたちの小遣いと同額に決定する。Blount が指摘するように、“It is as if Paddington is another child, with fur instead of clothes.” (Blount 311) である。また、Mrs Brown は、エスカレーターから立ち去る時、Judy と Paddington に対して “Come along, children,” (*A Bear Called Paddington* 60) と呼びかける。Mrs Brown は実の娘であり “a little girl” (*A Bear Called Paddington* 18) である Judy と年齢が不明のクマ Paddington を “children” という語で一括りにする。“children” は “child” の複数形であるが、“child” を *The Oxford English Dictionary* 第2版 (1989) で調べると、定義 BI では “With reference to state or age.”、定義 BII では “As correlative to parent.” と示されている。Mrs Brown による Judy と Paddington に対する “children” という呼びかけは、彼らが Mrs Brown という「親に対する子ども」という同じ立ち位置にあることが示唆されると同時に、年齢として「子ども」として認識されていることを示唆する。

ウェイトレスは Paddington に対して、“You don’t want that, dearie,” (*A Bear Called Paddington* 15) と呼びかける。“dearie” という語は、『ジーニアス英和大辞典』(2001) では “deary” の項目に記されているが、「主に年輩の女性が自分より若い女性・子供に対して用いる」(568) と説明されている。ウェイトレスは、そのような意味を含意する語を用いて Paddington に呼びかける。海辺で Paddington に声をかける写真屋は、Paddington に対して “Just watch the birdie.” (*A Bear Called Paddington* 122) と声をかける。“Watch [Look at] the birdie!” という言い回しは、『ジーニアス英和大辞典』の “birdie” の定義 1 において、「写真をとる時幼児にいう言葉」(234) と説明されている。これらの発言もまた、Paddington が「子ども」として人々から認識されていることを示唆する。

「子ども」として明示されていなくとも、Paddington は若い (young) 存在として人間たちに認識されている。Paddington のことを Mrs Bird は “young Paddington” (*A Bear Called Paddington* 33) と呼び、駅員は Paddington を “a young bear” (*A Bear Called Paddington* 53) と説明する。Mr Gruber や劇場スタッフ、Sir Sealy

Bloom も同様である (*A Bear Called Paddington* 85, 114, 116)。さらに、Sir Sealy Bloom は、Paddington のことを “the youngest and most important member of our company” (*A Bear Called Paddington* 116) と観客に紹介する。

また、Sir Sealy Bloom は Paddington をいなくなってしまった “prompt boy” (*A Bear Called Paddington* 106) の代理として起用する。“boy” は *The Oxford English Dictionary* 第2版において、定義1に “A male child below the age of puberty. [...]” と示されている。「子ども」という意味を含有する語が用いられている役割を Paddington が担うことは、Paddington が “boy” の範疇に含まれる存在であることを示唆する。Paddington は人々に「クマ」として認識されながら、しばしば「子ども」、特に Mrs Brown にはまさに彼女の子どもと同等の存在として認識されている。

しかし、Paddington は「大人」として扱われることもある。福本が指摘したように（福本7）、Mr Gruber が Paddington を “Mr Brown” (*A Bear Called Paddington* 84) と呼ぶことは、Mr Gruber によるその認識をまさに示している。劇場スタッフは Paddington のことを “A young bear gentleman” (*A Bear Called Paddington* 114) と呼ぶ。“gentleman” という語が含む “man” という語は、*The Oxford English Dictionary* 第2版において定義I1では “A human being [...]”、定義II4では “An adult male person.” と説明されている。劇場スタッフの Paddington を指示する語は、Paddington が「クマ」であると同時に「人間」であり、「若い」ながらも「大人の男性」であることを暗示する。

Paddington は彼自身が主張するように「クマ」であるが、それと同時にイギリスの人々からは「子ども」として認識されることもあれば、「大人」として認識されることもある。Paddington はその身に少なくとも3つの認識を受け止めているのである。なぜ彼はこのように多様な認識をされているのか。その理由の1つとして、Paddington がクマという動物の身体を持っていることが挙げられる。

第2節 クマ（動物）の身体が受け止める多様性

いくら多様な認識がされようとも、Paddington はクマである。それを最も表しているのが、テキストで描出される彼の身体である。Sheila A. Egoff は、“Like Milne, Bond made no attempt to keep an animal’s natural characteristics, beyond constant references to paws rather than feet.” (169) と述べているが、それでもやはり Paddington は本物のクマとしてテキストでは描出されている。彼は “a small, furry object” (*A Bear Called Paddington* 8) であるだけでなく、茶色で、“two large, round eyes” (*A Bear Called Paddington* 9) と黒い耳、前脚 (“paw” (*A Bear Called Paddington* 16)) を持

つ。小さなクマであるためにカフェのテーブルに乗り上げて飲み食いし、ついには足を滑らせ全身をクリームまみれにしまう (*A Bear Called Paddington* 16-19) といった、彼がクマの身体を持っているがゆえの行動を起こすこともある。Egoff が指摘する Paddington の “paw” という表現は、Paddington がクマであることを常に主張する。Paddington が風呂から上がった時には、“His fur, [...], was standing out like a new brush, except that it was soft and silky.” (*A Bear Called Paddington* 41) と表現され、彼のクマという毛に包まれた動物としての身体が描写される。Paddington はたとえ人間の子供もと一括りにされ、“gentleman” と呼ばれようとも、クマなのである。

Paddington の正確な年齢は、*A Bear Called Paddington* において明かされない。例えば彼の身体の大きさで年齢を推測するとしても、Paddington には “old bear” (*A Bear Called Paddington* 35) である Aunt Lucy の存在は示唆されるが、*A Bear Called Paddington* では彼女は姿を見せないため⁴、比較することはできない。Paddington は Mrs Brown に “You’re a very small bear,” (*A Bear Called Paddington* 10) と言われるが、彼はそれに対して “I’m a very rare sort of bear,” (*A Bear Called Paddington* 10) と返事をする。*The Oxford English Dictionary* 第2版によると “small” には大きさを示すことも年齢の幼さを示すこともあるが⁵、実際に Paddington は “a very short bear” (*A Bear Called Paddington* 51) というようにその身体の小さが示されている。そのために、彼の身体の大きさと年齢との関係はテキストにおいて不明である。地の文における Paddington を示す語から彼の年齢を把握することも難しい。英語には、子グマを示す “cub” という語がある。しかし、*A Bear Called Paddington* において Paddington は一貫して “bear” と呼ばれ、“cub” と呼ばれることはない。そのために彼が「子ども」か「大人」かの判別は、地の文における彼を示す語という点からも難しいと言えよう。しかし、だからこそ、Paddington はイギリスの人々から「子ども」とも「大人」とも認識されるのではないか。C. S. Lewis は Kenneth Grahame の *The Wind in the Willows* (1908) に登場する動物たちについて、“But why should the characters be disguised as animals at all? [...] Yet it is quite indispensable. If you try to rewrite the book with all the characters humanized you are faced at the outset with a dilemma. Are they to be adults or children? You will find that they can be neither.” (14) と述べている。この言説は、動物の身体が人間の身体では生じる年齢に対する疑問を上手く覆ってくれることを示唆する。

動物であるというだけでなく、彼がクマであることに注目すると、Paddington がこのような多様な認識を獲得していることの理由が見えてくる。中沢新一は、民話や童話、さらにはサーカスなどでクマが人気であることの理由として、「熊の中にはこのように最強の動物としての凶暴さや、瞬発的な攻撃力や、人間の幼児のようなから

だつきや、太極拳でもやりそうなゆったりとした動作や、いつも夢見ているような無垢さや、古代的な深い智恵などが一体になっています」(223)と述べている。このことから、クマという存在そのものが「動物」らしさ、「子ども」らしさ、「大人」らしさを内包していると考えられる。

クマの身体を持ち自ら「クマ」であることを自覚する Paddington は、だからこそ、「クマ」だけでなく、「子ども」、それと同時に「大人」として人々から認識されている。彼のクマという身体が、彼に対する多様な認識を許しているのだ。

第4章 イギリスの人間社会におけるクマ Paddington の位置づけ

英語を話すという参入切符を持ち、イギリスの人間社会に参入したクマ Paddington は、イギリスの人々から「クマ」としてだけでなく、「子ども」として、時には「大人」として認識されている。それでは、英語を話すクマである Paddington はイギリスの人間社会においてどこに位置づけられているのか。Paddington はクマという身体を持っているために多様な認識を人々から抱かれるが、彼はクマであるからこそ、イギリスの人間社会では特殊な存在となる。Blount は “he relies, in the end, on being a bear, and so everyone is kind.” (317) と述べているが、Paddington がクマであることによる特殊性はそれだけではない。Paddington がクマであるがゆえのイギリスの人間社会における位置づけを、子どもとの親和性、人間の法や規範からの逸脱、英語の名前の獲得と誕生日と年齢の設定、彼の周縁性から検討する。それによって彼が特殊な存在としてイギリスの人間社会において位置づけられていることが明らかになるだろう。

第1節 Brown 家において位置づけを共有する子どもと Paddington

〈Paddington Bear〉シリーズを論じる Blount は、Paddington の子どもと大人との関係について、“Mr Bond wisely ensures that the two children go to boarding schools so that the bear is not tied to children’s adventures but can mix with adults, as he eventually does, as an equal.” (312) と述べている。しかし、*A Bear Called Paddington* においては、Paddington と子どもたちのつながりがしばしば示されている。それが特に表れているのが、Brown 夫妻の Paddington の受け入れ場面での会話においてである。Brown 夫妻が Paddington を “one of the family” (*A Bear Called Paddington* 13) として受け入れる理由として、Paddington に対する同情に加え、

Mrs Brown は “He is rather sweet. And he’d be such company for Jonathan and Judy.” (*A Bear Called Paddington* 12) と言う。Mrs Brown は Paddington が彼らの子どもである Jonathan と Judy と “company” となるだろうと考える。これは、子どもとクマの Paddington との間に “company” としての関係を築くだろうという考えを Mrs Brown が持っていることを示唆する。

実際に少女の Judy は既に述べたように Paddington の過去に興味があることを彼に伝え (*A Bear Called Paddington* 20)、Mrs Bird に対して Paddington を紹介する (*A Bear Called Paddington* 26)。彼女は風呂場で Paddington が困難に陥っていることに気づき、兄弟の Jonathan とともに Paddington の様子を見にいく (*A Bear Called Paddington* 38-40)。Jonathan は、まだ見ぬ Paddington を受け入れることに対して、“the idea of having a bear in the family appealed to him” (*A Bear Called Paddington* 31) と地の文において示される。Paddington がエスカレーターを停止させてしまった時に彼を擁護するのも Judy である (*A Bear Called Paddington* 59)。また、Judy は、既に述べたように、Mrs Brown から Paddington と一括して “children” と呼ばれる。これは Judy と Paddington が Brown 家において同じ立場 (= “child”) を共有していることを示す。

Paddington と遊ぶのも主に子どもたちだ。*A Bear Called Paddington* の第7章 “Adventure at the Seaside” において海辺でともに駆けていくのも、砂の城作りの競争をするのも Paddington と Judy と Jonathan である。Judy と Jonathan は寄宿学校に通っているため、実際に Paddington とともにいる時間は Brown 夫妻や Mrs Bird、Mr Gruber よりも短いと考えられる。しかし、*A Bear Called Paddington* では Judy の休暇に物語の幕が上がるためか、先述したように Paddington と子どもたちの密接な関係が描かれている。Paddington は、「クマ」、「子ども」、「大人」として人々から認識されているが、子どもたちとの親和性を示唆される。そして、Brown 家における彼の立ち位置は Brown 家の子どもたちに非常に近いところに位置づけられているのだ。

第2節 人間の規範を逸脱する Paddington

Brown 家において子どもたちと同じ立場を共有しながらもクマである Paddington について、Smith は “his non-human Otherness can be used to his advantage” (45) と述べている。彼はクマであるためにいくつかの問題を収束させてしまうことがあるのだ。例えば、Paddington は「人間」ならば適用されるはずの法や常識から逸脱した存在となる。Smith が先の引用の例として示しているが (Smith 45)、Paddington がエス

カレーターを停止させてしまった時、Judy の機転によりクマである Paddington はその規則から逃れる。

“Did you say *persons* are expected to abide by the regulations?” Judy asked, firmly.

“That’s right,” began the inspector. “And I have my duty to do the same as everyone else.”

“But it doesn’t say anything about bears?” asked Judy, innocently. (*A Bear Called Paddington* 59)

“person” という語は、法律では人間を示す⁶。上記の引用から分かるのは、この社会の法の対象者は人間 (“person”) であり、人間に対して施行されるものであるということである。だからこそ、Judy はそれを逆手にとり、Paddington がクマであるためにその法の適用範囲外であることを主張し、結果的にそれが周囲の人間にも受け入れられる。

Mrs Brown と Judy とともに訪れた Barkridges というデパートで、ショーウィンドーのなかで物を積み上げるが最終的に崩してしまう Paddington について、Mrs Brown は現れた Barkridges の支配人に、彼が害を成そうとしたわけではないことを弁明する (*A Bear Called Paddington* 79)。しかし、実はその Paddington を見るために大勢の人々が集まり、さらには多くの電話がかかって来るという状態になっており、そのために Paddington は支配人に感謝され、マーマレードを手に入れる (*A Bear Called Paddington* 79-80)。このように、Paddington は、人間であれば罰せられたり非難されたりすることをしてしまった時、誰かに非難されたとしても、最後にはその責任から逃れたり、立場を好転させたりするのである。

Paddington は上記以外にも物事を好転させてしまうことがある。海辺での写真屋とのやりとりを見ていた Mrs Brown と Mrs Bird はそれについて次のように話している。

“I don’t know,” said Mrs Brown. “Paddington always seems to fall on his feet.”

“That’s because he’s a bear,” said Mrs Bird darkly. “Bears always fall on their feet.” (*A Bear Called Paddington* 124)

Mrs Bird は Paddington がクマであることを主張し、クマ全体を総体化して “[b]ears” には「困難を切り抜ける」(“fall on their feet”) 特性があると述べ、この特性を彼が

立場を好転させる理由としている。この場合、立場を好転させることはクマの特性として語られているが、Paddington のエスカレーターやショーウィンドーでの行動が許される理由は、彼がクマであるからだ。彼は英語を話すクマであるがゆえに、イギリスの人間社会に参入できるが、一方でイギリスの人間社会の規範や法から逸脱することができるのである。Paddington は、イギリスの人間社会に参入したクマであるからこそ、人間とは異なる特殊な立場に置かれている。

彼が動物のなかでもクマであるがゆえの特殊性が示唆される場面もある。エスカレーターに乗る時、Mrs Brown は “‘I suppose,’ [...], ‘we ought really to carry you. It says you’re supposed to carry dogs but it doesn’t say anything about bears.’” (*A Bear Called Paddington* 51) と言い、Paddington を抱えずにエスカレーターへ乗る。Mrs Brown は Paddington がイヌでないことから、人間と同じようにエスカレーターへ乗ることが許されるだろうと考える。Paddington はクマであるために人間とは異なる立場に置かれると同時に、同じく人間以外の動物であるイヌとも差異化されている。

第3節 英語の名前を得、誕生日と年齢を設定される Paddington

クマである Paddington は英語を話すことができるためにイギリスの人間社会に受け入れられる。そして、彼はイギリスの人間社会に参入し、イギリスの人々と関わることで「英語の」名前を与えられ、年齢を決定され、誕生日を設定される。

Brown 夫妻が Paddington を家に連れ帰ることを決め、彼らの名前を Paddington に告げた時、Paddington は “‘I haven’t really got a name,’ he said. ‘Only a Peruvian one which no one can understand.’” (*A Bear Called Paddington* 13) と告げる。そこで Mrs Brown は “English one” (*A Bear Called Paddington* 13) を彼に与える。Paddington 駅で見つけたことから Mrs Brown は彼に Paddington と名づけるが、彼女はこの名前を考えるにあたり “It ought to be something special,” (*A Bear Called Paddington* 13) と呟いている。彼女はこの英語の名前を特別なものとして認識しているのである。そして Paddington はこの名前が長いと言うが、 “I like Paddington as a name. Paddington it shall be.” (*A Bear Called Paddington* 14) と言って新たな「英語の」名前を受け入れる。Paddington は後に自らを「子ども」として扱う人物 (Mrs Brown) から与えられた名前を受け入れ、彼自身もその名前を名乗り、イギリスの人々もその名前で彼を呼ぶ。これ以前は地の文における彼の代名詞が “he” と “it” の間で揺れていたが、これ以降、彼の代名詞は “he” になっており、これは Paddington が作中の人間たちと同等の存在となったことを示唆する。

英語の名前を獲得するだけでなく、Paddington は年齢と誕生日を設定される。Paddington の年齢と誕生日について、テキストでは次のように書かれている。“No one, not even Paddington, knew quite how old he was, so they decided to start again and call him one. Paddington thought this was a good idea, especially when he was told that bears had two birthdays every year – one in the summer and one in the winter” (*A Bear Called Paddington* 137). この説明にあるように、Paddington を含め誰も彼の正確な年齢を知らないために、「彼ら」(“they”) は——この「彼ら」は Paddington に加え、Brown 一家、さらには Mrs Bird までもを含むかもしれない——「最初からやり直す」ことに決め、Paddington の年齢を 1 歳とする。Paddington だけではなく、イギリスの人々も一緒に Paddington の年齢を決めるのである。

先の引用における、クマには誕生日が年に 2 回あると Paddington が「言われた」(“was told”) という説明は、Paddington がその事実を知らなかったことを示唆すると同時に、クマには年に 2 回誕生日があること自体がイギリスにおける常識であるかのようにも見える。Paddington 自身が彼の誕生日を知っていたかどうかは語られないが、彼が自身の誕生日を知っていたとしても、彼がクマには誕生日が年に 2 回あると「言われ」、それを受け入れたことから、彼の 2 回ある誕生日のうち一方はイギリスに来てから設定されたと言える。また、先の引用では 2 回の誕生日が “one in the summer and one in the winter” と説明されており、クマの誕生日が夏と冬であることもまたイギリスにおける常識のようにも見える。その場合、Paddington は 2 回ある誕生日の両方を設定されたことになる。

しかし、年齢や誕生日の設定においても Paddington がクマであることが作用している。先の引用にあるように、彼はクマであるために誕生日が年に 2 回設定される。誕生日の回数について、Paddington は Mrs Bird に “Just like the Queen” (*A Bear Called Paddington* 137)、“So you ought to consider yourself very important.” (*A Bear Called Paddington* 137) と言われるが、彼のこの特殊性は、彼がクマであるために付与されたものなのだ。

第 4 節 周縁に位置づけられる Paddington

Paddington は英語を話せるためにイギリスの人間社会へ受け入れられるが、動物である彼は Brown 家では Brown 家の子どもたちと同じ立場を共有する存在として位置づけられると同時に、イギリスの人間社会では人間とは異なる特殊な存在として位置づけられている。しかし、Paddington は様々な点において周縁として位置づけられている。最後にこの点を、簡単ではあるが、彼が「移民」であることも絡めて述べ

ておきたい。

Paddington は、既に述べたように様々な点において周縁にある。Brown 家においては「大人」に対する「子ども」であり、老いた存在である Aunt Lucy に対して若い存在でもある。彼は人間に対して法整備がされているイギリスという人間社会では人間に対する動物であり、イギリスという国では自国民に対する Darkest Peru 出身の他国民である。

しかし Paddington は、イギリスの人間社会において、「大人」としても認識され扱われることもあれば、人間とは異なる特殊な存在としても扱われる。“a home for retired bears” (*A Bear Called Paddington* 10) に入所した Aunt Lucy とは異なり、彼は Darkest Peru には留まらずイギリスへ移住し、移民となる。Paddington は、動物であるために「子ども」としても「大人」としても人々に認識され、扱われる。しかし、彼は英語 (Paddington から見れば他国の言語) を話せるために、動物でありながらも他者であることを理由に拒否されることなく人間社会へ参入できると同時に、Darkest Peru からの移民としてもイギリスという国へ参入できる。Paddington は周縁に置かれる存在でありながら、上記に挙げた様々な対立を乗り越えられる存在となる。それを可能にしていることこそが、Paddington が英語を話す動物であることなのだ。

おわりに

Paddington はイギリスの人間社会への参入切符である英語を話す能力を持つクマである。彼は英語を話すことでイギリスの人間社会に参入し、受け入れられる。Aunt Lucy から英語を話すことを教わった Paddington は、英語でイギリスの人々に話しかけ、多くの人々と縁を結んでいく。彼はクマであるが、英語を話すことで多くの人々と縁を結び、イギリスの人間社会に受け入れられていく。

英語を話すことでイギリスの人間社会へ踏み入れた Paddington は、クマという身体を持っているために、イギリスの人々から「クマ」というだけでなく、「子ども」や「大人」として認識され、扱われる。実際に Brown 家において彼は人間の子どもの強い親和性を持つ存在として位置づけられる。しかし、Paddington はクマであることによって、人間、あるいは普通の人間とは異なる存在としても位置づけられる。人間社会の規範である人間の法の外に置かれ、人間にはない特性を持ち、イギリスの人間社会において重要な人物 (Queen) と同じ特殊性を付与される。

Paddington の人間社会における受け入れられ方を見てみると、*A Bear Called*

Paddington では、動物が英語を話す存在として人間社会に参入する時、動物は人間と対等というよりもむしろ、特殊な立ち位置にあると言える。それと同時に、*Paddington* は様々な点において周縁にある。しかし *Paddington* は周縁にあるが、英語を話すクマである。そのために彼は様々な対立を乗り越えることができ、実際に国を移るという越境をも可能にし、参入先の社会に受け入れられると同時に特殊な存在として位置づけられているのだ。

しかし、これが *Paddington* のみの特殊性なのか、あるいはクマの特殊性なのかを結論づけるには、*A Bear Called Paddington* 以降の〈*Paddington Bear*〉シリーズの作品も視野に入れる必要があるだろう。*A Bear Called Paddington* には *Paddington* の持つベーコンの匂いにつられた数匹のイヌも登場するが、彼らはものを言わず吠えるだけであり、*Paddington* と同じ地平に立っているとは言い難いことは指摘しておく。先述したように、シリーズの他の作品では他の動物も登場するが、今回は *A Bear Called Paddington* を研究対象としたため触れなかった。また *Paddington* 以外のクマ、Aunt Lucy や彼のおじもまた、今回対象とした作品に登場しなかったため触れなかった。ちなみに彼らは「移民」ではないことは指摘しておこう。そのため、今後の課題として、〈*Paddington Bear*〉シリーズの他の作品も含め、*Paddington* の位置づけをさらに検討していきたい。

註

- 1 *Paddington* が登場する作品は、小説や絵本といった形式で数多く出版されている。2017年に出版された *Paddington's Finest Hour* を含め、主となる小説は15冊刊行されている（2017年9月現在）。
- 2 フランスのホテルの支配人である Madame Penet と対比的に、“Madame Penet's English was no better than Paddington's French [...]” (*Paddington Abroad* 78) とフランス語を話すことが示唆される。しかし作中では *Paddington* に対して Madame Penet は英語で話しかけ、*Paddington* も英語で答えている。
- 3 続編である *More About Paddington* (1959) において、*Paddington* 自身は名前の綴りを Brown 家の隣人 Mr Curry に指摘された時、彼は “It's how I spell it,” (78) と言い返す。そのため、*Paddington* の名前の綴りの間違いは、*Paddington* にとっては間違いとは言えないことが示唆される。
- 4 Aunt Lucy が姿を現すのは *Paddington on Top* (1974) においてである。
- 5 *The Oxford English Dictionary* 第2版では、“small” の定義 AII3a では、“Of

limited size; of comparatively restricted dimensions; not large in comparison with other things, esp. of the same kind.” とされている。また定義 AII3c では、“Of children, etc.: Not fully grown or developed; young.” とされている。

- 6 *The Oxford English Dictionary* 第2版では、“person” の定義 IV6a において、“A human being (*natural person*) or body corporate or corporation (*artificial person*), having rights and duties recognized by the law.” と説明されている。

引用文献

- 安藤聡「子グマの姿を借りた英国紳士の肖像：『くまのパディントン』」『英米児童文学のベストセラー40：心に残る名作』成瀬俊一編著、ミネルヴァ書房、2009年、50-53頁
- 笹田裕子「第4章 子どもの文化 *Introduction*」『英米児童文化55のキーワード』白井澄子、笹田裕子編著、世界文化シリーズ〈別巻〉①、ミネルヴァ書房、2013年、102-103頁
- 中沢新一『熊から王へ』カイエ・ソバージュⅡ、講談社、2002年
- 福本由紀子「Paddington Bear 物語における marmalade の意味」*Mukogawa Literary Review* 50 (2013) : 1-19.
- 森恵子「ぼくの行くところ、一騒動：『くまのパディントン』 M. ボンド」『たのしく読める英米児童文学：作品ガイド120』本多英明、桂宥子、小峰和子編著、シリーズ・文学ガイド⑥、ミネルヴァ書房、2000年、126-127頁
- 矢野智司『動物絵本をめぐる冒険：動物－人間学のレッスン』勁草書房、2002年
- “Birdie.” 名詞定義1『ジーニアス英和大辞典』小西友七、南出康世編集主幹、大修館書店、2001年、234頁
- “Deary.”『ジーニアス英和大辞典』小西友七、南出康世編集主幹、大修館書店、2001年、568頁
- Blount, Margaret. *Animal Land: The Creatures of Children's Fiction*. New York: William Morrow & Company, 1975.
- Bond, Michael. *A Bear Called Paddington*. London: HarperCollins Children's Books, 2014.
- . *More About Paddington*. London: HarperCollins Children's Books, 2014.
- . *Paddington Abroad*. London: HarperCollins Children's Books, 2014.
- . *Paddington on Top*. London: HarperCollins Children's Books, 2014.

- . Postscript. *A Bear Called Paddington*. By Bond. London: HarperCollins Children's Books, 2014. 155-159.
- Egoff, Sheila A. *Worlds Within: Children's Fantasy from the Middle Ages to Today*. Chicago: American Library Association, 1988.
- Grayson, Kyle. "How to Read Paddington Bear: Liberalism and the Foreign Subject in *A Bear Called Paddington*." *British Journal of Politics and International Relations* 15.3 (2013): 378-393.
- Hunt, Peter and Karen Sands. "The View from the Center: British Empire and Post-Empire Children's Literature." *Voices of the Other: Children's Literature and the Postcolonial Context*. Ed. Roderick McGillis, Children's Literature and Culture vol.10, New York: Garland Publishing, 2000. 39-53.
- Lewis, C. S. "On Stories." *Of Other Worlds: Essays and Stories*. 1966. Ed. Walter Hooper, New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1975. 3-21.
- Smith, Angela. "Paddington Bear: A Case Study of Immigration and Otherness." *Children's Literature in Education* 37.1 (2006): 35-50.
- "Boy." sb.¹, Def.1. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- "Child." sb., Def. BI. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- . sb., Def. BII. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- "Man." sb.¹, Def. II. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- . sb.¹, Def. II4. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- "Person." sb., Def. IV6a. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- "Small." a. and sb.², Def. AII3a. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- . a. and sb.², Def. AII3c. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.